

高等教育機関における「弾き歌い」の パフォーマンス評価についての研究

— ルーブリックにおける評価基準の今日的整理と検討 —

A Study on Performance Assessment of “Singing with Piano” in Institutions of Higher Education
— Contemporary Arrangement and Examination of the Evaluation Criterion in a Rubric —

児童学科 川上 健太郎*
Dept. of Child Studies Kentaro Kawakami

* 日本女子大学学術研究員

抄 録 高等教育機関における「弾き歌い」の研究では、その指導法に関する研究が充実している一方で、評価に関する研究の蓄積は十分であるとは言い難い。本研究は、「弾き歌い」に関するパフォーマンス課題とパフォーマンス評価に使用されるルーブリックを導入した教育実践を調査し、その内容や特徴を分析した。又、ルーブリックの内容を比較することによって、ルーブリックにおける評価基準の今日的整理と検討を行った。その結果、新たにパフォーマンス課題を策定し、ルーブリックを作成する際に有益な視点が示唆された。

キーワード : 「音楽実技」, 「弾き歌い」, パフォーマンス課題, パフォーマンス評価, ルーブリック

Abstract In a study of “singing with piano” in institutions of higher education, there is much less research on assessment than research on teaching methods. The study investigated the educational practices on the performance task of “singing with piano” and the rubrics used for its assessment, and its contents and characteristics were analyzed. In addition, contemporary arrangement and examination of evaluation criterion in a rubric were conducted through comparing the contents of three rubrics. As a result, instructive suggestions for setting performance tasks and creating rubrics were indicated.

Keywords: Musical Skills, Singing with piano, performance task, performance assessment, rubric

1 はじめに

1-1 「弾き歌い」に関する研究動向

保育者養成系学科や教員養成系学科のカリキュラムにおける「音楽実技」では、ピアノや歌唱の実技レッスンや音楽の基礎知識を学ぶための楽典で授業が構成される。それらのシラバスを概観すると、保育士試験や小学校教員採用試験で課される子どもの歌、文部省唱歌などを自身の演奏するピアノに合わせて歌う方法である「弾き歌い」が授業内容として記述されている。「弾き歌い」は、保育・教育現場

での音楽表現に必要とされる演奏法であるが、「音楽実技」の授業内で指導者が学生の「弾き歌い」の技術や能力の涵養にどのように努めているのか、まず国内の研究動向を調査することで「弾き歌い」に関する授業実践を概観したい。国立情報学研究所（NII, National Institute of Informatics）が運営する学術データベースである CiNii（Citation Information by NII）で、「弾き歌い」に関する研究動向を検索すると、327 件の研究論文が確認できた¹。これらの研究論文の題目に含まれるテーマについて、題目というデータの全体像を探ることや題目に含まれる

語と語の関連性を明らかにすることで、「弾き歌い」の研究論文の題目に含まれるテーマを“探索的に”アプローチし、特定のテーマへ注目することが可能であると考え¹⁾、本研究では、処理内容をすべて明らかにしたフリー・ソフトウェアである KH Coder (Ver. 3.Beta.01a) (樋口) を使用することとした²⁾。論文の題目を KH Coder で分析したところ総抽出語数(使用)は 6008 (3011) 語、異なり語数(使用)は 693 (538) 語であった³⁾。まず、出現している語の一覧を確認するための抽出語リスト(表1)より、抽出語リストにおける「指導」という単語の頻度の多さから指導法に言及した論文が多いことが推察される。又、共起ネットワーク(図1)をもとに題目に含まれる語と語が共に出現する関係性に着目すると、「保育者養成校の弾き歌いの指導に関する考察」、「小学校教員養成課程における実技指導」、「弾き歌い授業の実践報告」、「弾き歌いの学習の効果と課題」、「初心者にとって有効な練習方法」、「子どもの歌」、「簡易伴奏」、「幼稚園実習における弾き歌い活動とアンケート調査分析」、「幼児の音楽教育」という9つのテーマに分類することができた。

1-2 研究の目的

以上の研究動向の調査をもとに、本研究では「評価」という語に着目するが、理由は以下の通りである。まず、「評価」という語の出現頻度(12回)の少なさにみられるように(表1)、「弾き歌い」の研究における評価に関する研究の蓄積がまだ十分でないことが挙げられる。又、学校教育現場では、「指導と評価の一体化」の必要性が説かれている中で、高等教育機関の「弾き歌い」という授業においても、そのような視点をもった授業が導入されているか明らかにすることは意義があると考えた。

さて、文部科学省国立教育政策研究所の示した『指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料』²⁾では、「児童生徒自身に学習の見通しをもたせるために、学習評価の方針を事前に児童生徒と共有する場面を必要に応じて設けること」が求められているが、「弾き歌い」の授業における評価の方針を事前に学生と共有した実践例を確認したい。学生の「弾き歌い」の聴取を通して、指導者が助言をし、評価するという授業の形態が「音楽実技」の慣例であると推察されるが、指導者がどのような評価の観点をもって指導に当たっているのか、評価の

表1 抽出語リスト

順位	抽出語	頻度	順位	抽出語	頻度
1	弾き歌い	208	26	歌唱	21
2	保育	150	27	教材	21
3	指導	130	28	実習	20
4	ピアノ	129	29	初心者	20
5	養成	123	30	分析	19
6	音楽	90	31	活用	18
7	考察	82	32	実技	18
8	表現	50	33	アンケート	17
9	授業	49	34	活動	17
10	学生	40	35	効果	17
11	教育	40	36	方法	17
12	教員	36	37	幼児	17
13	実践	36	38	用いる	15
14	学習	34	39	可能	13
15	伴奏	34	40	目指す	13
16	課題	33	41	練習	13
17	課程	31	42	中心	12
18	幼稚園	31	43	評価	12
19	研究	28	44	簡易	11
20	子ども	28	45	教諭	11
21	調査	28	46	検討	11
22	試み	26	47	取り組み	11
23	演奏	25	48	小学校	11
24	歌	23	49	育成	10
25	技術	22	50	向ける	10

観点を事前に明示し、学生と共有することが必要であるとする。そのような点で、ルーブリック(rubric)を授業で導入した実践は示唆に富んだものであると言えよう。ルーブリックとは、「複数の基準とレベル、それを説明する記述語からなる評価基準表³⁾」(松下, 2012, p.76)であり、「ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具⁴⁾」(Stevens & Levi, 2013, p.2)と定義される。「できるようになってもらいたい事柄」とは、松下の定義における「複数の基準」を指しているが、指導者の掲げる評価基準を事前に明示し学生と共有することは、「指導と評価の一体化」をねらいとした授業実践であると考えられる。

以上より、本研究では、以下の2点を研究の目的とする。まず、ルーブリックを導入した教育実践の調査を通して「弾き歌い」の授業で指導者がルーブリックにどのような評価基準⁴⁾を策定しているのかを明らかにすることである。又、それぞれのルーブリックを比較することで、評価基準を整理し、その

高等教育機関における「弾き歌い」のパフォーマンス評価についての研究
 ―ループリックにおける評価基準の今日的整理と検討―

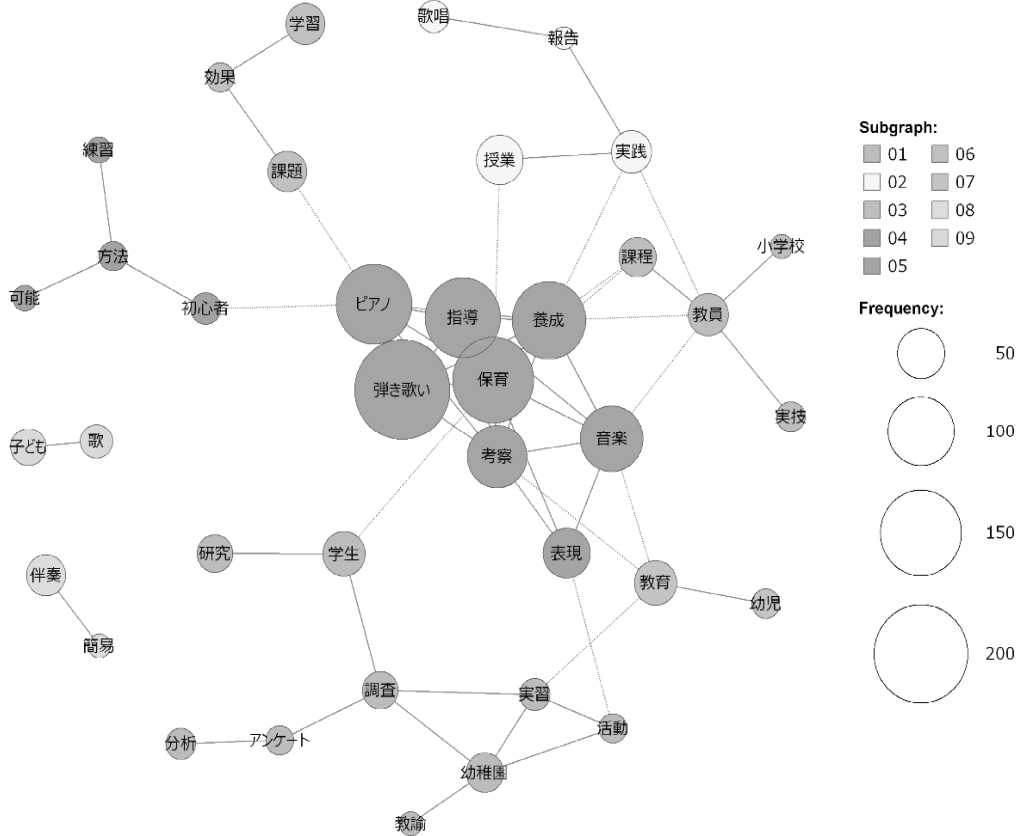


図1 共起ネットワーク

内容や特徴を検討することである。

2 研究方法

松下（2010）⁵⁾は、ループリックはパフォーマンス⁵⁾を評価するために多くの場合用いられることを指摘しているが、「弾き歌い」に関するループリックを導入した授業実践である島川（2013）⁶⁾、井上（2019）⁷⁾、木下（2019）⁸⁾の3件を本研究の対象とする⁶⁾。これらの実践を概観すると、「弾き歌い」による学生による実演とそれを評価するループリックが明示されているが、評価課題である「パフォーマンス課題（performance task）」と評価基準である「ループリック」が示されているという点で、パフォーマンス評価の特徴を表した実践であると言える。パフォーマンス評価（performance assessment）とは、「ある特定の文脈のもとで、さまざまな知識や技能などを用いながら行われる、学習者自身の作

品や実演（パフォーマンス）を直接に評価する方法」と定義される（松下，2012，p.76）⁹⁾。本研究では、松下（2012）の概念的枠組みを採用することで、以下の3つの視点からパフォーマンス課題とループリックの内容や特徴を分析する。

- ①どのようなパフォーマンス課題が提示されているのかその内容を明らかにする。その際、松下（2012）の指摘するパフォーマンス課題の特徴であるパフォーマンス課題の文脈性（パフォーマンスは具体的な状況の中で可視化され、解釈される）、複合性（それ以上分割すると本来の質を失うという、一まとまりのパフォーマンスを行わせる）を持ち合わせているかについても検討する。
- ②ループリックはいくつかのタイプに分けられるが、松下（2012，p.83）の指摘する以下の3点をもとにどのタイプに該当するか吟味する。まず、「構造」について基準を複数設定して分析的に評価す

る「分析的ルーブリック (analytic rubric)」, 基準を複数に分けずに全体的に評価する「全体的ルーブリック (holistic rubric)」に分類できる。次に, 「スコープ」についてだが, ある領域で一般的に適用できる「一般的ルーブリック (generic rubric)」, 当該課題だけに適用される課題特殊のルーブリック (task-specific rubric) に分類できる。そして, 「スパン」では, 複数年にまたがって使われる「長期的ルーブリック (longitudinal rubric)」, 「短期間あるいはスナップショット的に使われる採点用ルーブリック」に分類できる。

③ルーブリックにおける評価基準とその記述語を通して, どのような内容や特徴が見られるかを検討する。

3 研究結果

3-1 島川 (2013) の分析結果

3-1-1 パフォーマンス課題について

授業内におけるグループでの弾き歌い学習と最終試験において, 一人の教師役を実践する学生の「弾き歌い」に合わせて, 複数の学生が歌唱するという文脈で, 「弾き歌い」のパフォーマンス課題が提示されている。又, 1 曲を通すことが求められるパフォーマンス課題であることから「課題の複合性」が確保されている。

3-1-2 ルーブリックの特徴について

基準を複数に分けずに全体的に評価していることから, 「全体的ルーブリック」であり, 当該課題だけに適用されるものであるため, 「課題特殊のルーブリック」である。又, 当該ルーブリックは, 「音楽」の授業内のみで使用され, 学生の自己評価のツールとして機能していることから「短期間あるいはスナップショット的に使われる採点用ルーブリック」であると言える。

3-1-3 評価基準の策定について

島川は, 先行研究をもとに, 評価基準を策定しているが⁷, 評価基準は①正確な読譜, ②スムーズな運指による正確なリズム表現, ③歌詞の正しい発音, ④適切な音楽の流れ, ⑤歌いだしの合図, ⑥歌詞の意味の理解と内容の表現, ⑦子どもの声を受け止め, 表現の喜びを子どもと共有すること, の7つに分類できた⁸。

3-2 井上 (2019) の分析結果

3-2-1 パフォーマンス課題について

一人ひとりが保育者役となって, 朝の会 (帰りの会) を想定し, 「弾き歌い」を行っている。又, 子ども役の数名の学生に対して, 保育現場で想定される声かけも行いつつ, 6 つの曲を選曲し, 朝の会 (帰りの会) を構成している。

3-2-2 ルーブリックの特徴について

基準を複数設定して分析的に評価していることから「分析的ルーブリック」であり, 当該課題だけに適用されるものであるため, 「課題特殊のルーブリック」である。又, 当該ルーブリックは, 「音楽」の授業内のみで使用され, 学生の自己評価と指導者による評価に使用されていることから, 「短期間あるいはスナップショット的に使われる採点用ルーブリック」であると言える。

3-2-3 評価基準の策定について

井上は, 「学生に身につけさせたい能力・知識の要素」を評価基準としているが⁹, 策定にあたり先行研究への言及がないことから, 指導者自身が策定した評価基準であることが推察される。当該ルーブリックは, 「分析的ルーブリック」のため, 評価基準は明記されているものの, 評価基準が指す内容をより明らかにするため, 評価基準を説明した記述語を筆者がまとめたものを表2に示す。

3-3 木下 (2019) の分析結果

3-3-1 パフォーマンス課題について

パフォーマンス課題として, 弾き歌いの試験を実施している。又, パフォーマンスのシナリオとして盛り込むことが有効だと指摘される6要素 (GRASPS)¹⁰をもとにパフォーマンス課題を作成したことが明記されており¹⁰, 「パフォーマンスのゴール (G)」として, 「自分の力量に合わせた伴奏方法を選択し, 演奏を止めることなく最後まで演奏し, 歌の音量がピアノの音量に対し小さくなりすぎないように意識すること」について設定している。「自分の力量に合わせた伴奏方法を選択」することは, 「コード伴奏」¹¹や「楽譜通りに演奏すること」を示していると考えられるが, 当該実践において, 指導者自身がアレンジを施した楽譜を使用していることから学生による伴奏のアレンジが見られたかは判別で

表2 井上 (2019, pp.80-81) のループリックにおける
 評価基準と記述語 (筆者が作成)

評価基準	記述語
始まり・曲間・終わりの声かけ	・声かけの有無 ・声量 ・表情 ・園児とのやり取り
弾き歌い (前奏)	・前奏の速さと調 ・歌いだすタイミング
メロディー奏	・止まらず弾けること ・歌詞に合ったリズム
伴奏	・正しいコード進行 ・歌に合ったビート ・アレンジの有無 ⁹
歌唱	・正しい音程 ・正しいリズム ・正しい歌詞 ・歌詞に合わせた表情 ・声量
曲構成	・会に合わせた曲の構成 ・工夫のみられる選曲

きなかった。そして、「生徒の役割 (R)」として、「弾き歌いをする学習者が教師または保育者役となり、他の学習者が子ども役となって、音楽の授業、あるいは保育現場における一斉歌唱の活動を模擬的に行う」ことが設定されている。

3-3-2 ループリックの特徴について

基準を複数に分けずに全体的に評価していることから、「全体的ループリック」であり、当該課題だけに適用されるものであるため、「課題特殊のループリック」である。又、当該ループリックは、「音楽」の半期の授業内のみで使用され、学生の自己評価のツールとして機能していることから「短期間あるいはスナップショット的に使われる採点用ループリック」であると言える。

3-3-3 評価基準の策定について

木下は、島川 (2013) の先行研究をもとにループリックの評価基準を策定しており、①適切な姿勢、②曲の流れの意識、③適切なリズム、④適切なテンポ、⑤止まらず弾けること、⑥歌唱の音程の適切さ、⑦歌詞の聞き取りやすさ、⑧ピアノと歌の音量バランス、⑨適切な合図、⑩曲想にふさわしい音色、⑪楽譜に示された強弱や記号を取り入れた演奏、という 11 の評価基準に分類できた¹²。又、当該ループ

リックは、当該大学の「学士力ループリック」の内容のうち、「問題解決力」に着目した上で、「学士力ループリック」との接続を試みていることが明記されている¹¹⁾。

4 考察

3 件の教育実践におけるパフォーマンス課題とループリックの内容や特徴について吟味したが、それぞれの実践の比較をもとに考察に繋げる。

4-1 パフォーマンス課題と真正性

3 件のパフォーマンス課題の特徴から、保育・教育現場と類似した「文脈性」をもつパフォーマンス課題の存在が明らかとなった。松下 (2010) は「文脈性はパフォーマンス評価の特徴であり、ここでは真正性 (authenticity) が求められる」と述べた上で¹²⁾、「真正性」とは、「本物であることを意味し、(中略) 評価論においては、仕事場や市民生活などパフォーマンスの行われる多様な文脈を模写することをさす (p.457)。」と定義している。だが、松下は、数学の問題を例に、「あまりに真正性を追求すると課題が複雑になりすぎて、多くの子どもが解答できなくなってしまう」とことと「文脈性は、子どもたちに経験してもおかしくないと感じさせる程度の真正性にとどまらざるをえない」ことを指摘するため¹³⁾、「弾き歌い」のパフォーマンス課題の場合、そのような問題が見られるのか検討したい。

井上 (2019) のパフォーマンス課題では、教師役の学生が子ども役の数名の学生に対して「声かけ」をすることを求めているが、これは、実際の保育現場での「弾き歌い」の実践の「真正性」を追求した事例であると考ええる。本来、子どもの観察を通してはたらきかける言葉が声かけであると考えるが、保育現場で予測される子どもの反応を発達段階の異なる子ども役の大学生に求めることが適切なのか疑問が残る。当該パフォーマンス課題の「文脈性」と「真正性」の兼ね合いが求められる。

4-2 ループリックの特徴

ループリックの「構造」について島川と木下は「全体的ループリック」を提示しているが、木下はその実践の中で以下のような学生の意見を取り上げている¹⁴⁾。

・紙が見づらくて見る機会が少なかったため、活

用せずに終わってしまいました。

- ・毎回プリントを見てという動作に面倒さを感じた、習慣化できなかった。

これは、評価基準を複数に分けていない「全体的ループリック」の特徴からそのような意見が散見されたと推察するが、「分析的ループリック」の特徴も踏まえた上で、ループリックを作成する際の視点について述べたい。井上の「分析的ループリック」における記述語に着目すると、評価尺度が上がれば上がるほど、記述語の質的・量的な充実度が見られる¹³。これは、井上の掲げた評価基準が様々な記述語を内包するものであることから(表2)、評価尺度によって、評価基準の記述語のボリュームが異なっているのである。よって、「分析的ループリック」を作成する際にも「見やすさ」を考慮することが求められると考える。つまり、“評価基準の具体性”に着目して評価基準を策定する必要性が示唆されたと言える。

「スコープ」について、3件とも「課題特殊的ループリック」であることから、当該課題だけに適用されるループリックである。その中で、木下の「学士力ループリック」との接続の視点は、「弾き歌い」の学習が大学全体での学びにおいてどのような位置づけとなるか捉える上で、示唆に富んでいると言える。しかし、当該ループリックでは、具体的にどの評価基準と「学士力ループリック」の内容が関わっているのかについての指摘は見られない。そこで、両ループリックを接続する際の視座を得るために大学全体で用いられる「学士力ループリック」が授業科目において適用された事例を確認したい。アメリカのアルヴァーノ・カレッジ(Alverno College)は、「能力をベースにしたカリキュラム(Ability-Based Curriculum)」や「学習評価(パフォーマンス評価など)」の取り組みで知られており、わが国の学士力や社会人基礎力の概念や取り組みにも影響を与えている(松下, 2012, pp.85-87)。組織的なパフォーマンス評価が行われ、「能力をベースにしたカリキュラム」が評価の基盤となっており、そのフレームワークは、機関全体を通して身につけさせる8つの能力と6つのレベルからなる。ここでは、抽象度の高い「一般的ループリック」を各専攻において、さらには各授業科目で具体化した事例を確認できるが、機関全体を通して身につけさせる8つの能力を各科目の担当教員や学科が、自分たちの学問

分野の言葉で再記述していることは注目に値する¹⁵⁾。このことから、「弾き歌い」のパフォーマンス評価において、高等教育機関の「学士力ループリック」の評価基準を担当教員や学科が自分たちの学問分野の言葉で再記述することは、「課題特殊的ループリック」と「学士力ループリック」を接続する際の有益な視点となると考える。又、「課題特殊的ループリック」が単なる課題特殊的ループリックの特徴を帯びたものに留まらず、「一般的ループリック」と近接する可能性も示唆していると言えよう。

「スパン」について、3件とも「短期間あるいはスナップショット的に使われる採点用ループリック」であるが、保育者養成系学科や教員養成系学科における「音楽実技」の受講期間や授業形態を考慮した選択であると考えられる。今後、学生の「弾き歌い」に関する能力を長期的・経時的に評価した研究の蓄積が望まれる。

4-3 評価基準の今日的整理と検討

3件の教育実践で導入されたループリックの評価基準の分析から、「弾き歌い」の指導現場において今日的に共通したものとと思われる評価基準と独自性をもつと思われる評価基準がみられた。

それらの評価基準を考察する上で、全国保育士養成協議会¹⁴が実施する保育士試験では、どのような音楽に関する技術が求められているのかに着目し、「弾き歌い」の指導現場で掲げられている評価基準とどのように関わっているのかを考察する。保育士試験では、求められる力として「保育士として必要な歌、伴奏の技術、リズムなど、総合的に豊かな表現ができること」を挙げているが、これと評価基準の関わりを示したものが表3である。

表3 保育士試験で求められる力と評価基準との関わり(筆者が作成)

求められる力	評価基準
歌の技術	歌詞の音程の適切さ
	歌詞の聴き取りやすさ
	歌詞の間違いない歌唱 適切な合図
伴奏の技術	止まらずに演奏すること
	適切な姿勢
	適切なテンポ
	正しいコード進行

	歌唱に合わせたビート
	アレンジの有無
リズム	適切なリズム

上記の表の中に分類できなかったものとして、「歌詞の意味の理解と表現」、「曲想にふさわしい音色」、「楽譜に示された強弱や記号を取り入れた演奏」を挙げる。これらの評価基準は、学習指導要領における音楽科の内容に含まれる文言と類似していることから¹⁶⁾、初等・中等教育課程の学生の「弾き歌い」を指導する際には、有効な視点であると考えられる。又、「ピアノと歌の音量バランス」について、保育の現場では、アップライトピアノや電子キーボードが使用され、グランドピアノで「弾き歌い」を実践することは稀少である。そのような中で、大学の試験や授業でグランドピアノを用いて「弾き歌い」が行われる事例も考慮すると、「ピアノと歌の音量バランス」という評価基準の設定は適切であるのか検討が必要である。

5 おわりに

本研究では、パフォーマンス課題とパフォーマンス評価に用いられたループリックの内容や特徴を分析することによって、「弾き歌い」の授業で指導者がどのような評価基準を掲げているのか明らかとなり、それぞれのループリックを比較することで、評価基準を整理し、その内容を検討することができた。最後に本研究の課題と限界を述べる。

まず、本研究では、パフォーマンス課題の「文脈性」と「真正性」の兼ね合いについて述べたが、「弾き歌い」の授業でどの程度の真正性を求めるべきなのか、パフォーマンス課題の対象である学生の視点・評価に携わる指導者の視点の双方からパフォーマンス課題の内容を検討することが必要である。

次に、「学士力ループリック」の評価基準を担当教員や学科が自分たちの学問分野の言葉で再記述することで、「課題特殊的ループリック」と「学士力ループリック」を接続する際の有益な視点となり得ることは前述したが、「学士力ループリック」の評価基準は「課題特殊的ループリック」におけるどの評価基準と関わりがあるのか、「学士力ループリック」における評価基準を「課題特殊的ループリック」で具体的にどのような言葉で表すのが適切であるの

か、今後の研究が望まれる。

最後に、ループリックの作成や採点においては、信頼性 (reliability) が問題となるが¹⁷⁾、本研究で取り上げた3つのループリックにおいて、信頼性の確保のためにどのような方法がとられたか確認することができなかったため、検討の余地を残していると言える。

注

- 327 件の研究論文が確認できたが、その中で同一の論文が重複されて提示されてしまっている事例が確認できた (2022 年 9 月 15 日時点)。それらを取り除いた上で、302 件の研究論文を調査対象とした。
- KH Coder は処理内容をすべて明らかにしたフリー・ソフトウェアであり、開示できないノウハウを含む商用ソフトウェアとは異なることから本ソフトウェアを使用した。
- 「弾き歌い」という単語は「弾く」と「歌う」という 2 つの単語に分かれてしまうため、「弾き歌い」として強制抽出を行った。
- 「キジュン」という言葉について、「評価規準」と「評価基準」と区別される例もあるが、本稿では、松下 (2012) の指摘をもとにすべて「評価基準」で統一することとした。
- 松下 (2012) は、英語の“performance”に「遂行」「成就」／「業績」「成果」／「演技」「演奏」／「できばえ」／「性能」といった多様な意味があることを踏まえた上で、実際に課題や活動を遂行させて、その遂行ぶり (実演) や遂行の成果物 (作品) のできばえを評価するというのが、パフォーマンス評価の基本的な意味であると述べている。
- 木下 (2017) の研究においても、ループリックが導入された事実は確認できたが、どのようなループリックが導入されたのか本文中にループリックが明示されていない。
- 先行研究として、金指 (2009)、登 (2010)、トーマス (1977) を挙げている。
- 「全体的ループリック」のため、評価基準は複数に分類されていないが、当該ループリックにおける評価基準をより詳細に比較したいため、評価基準を複数に分類して分析を試みた。
- 「適切な伴奏形」という記述語の表記があった

が、「原曲のアレンジ」に該当するものとして取り扱った。

- 10 GRASPS とは、「Goal (目的)」、「Role (役割)」、「Audience (相手)」、「Situation (状況)」、「Product/Performance (作品やパフォーマンス)」、「Standards and criteria for success (評価の観点)」を示す(西岡, 2008)。
- 11 コードを用いた伴奏方法のことであるが、コード(chord【英】)という単語が示すように、和音による伴奏のみを実践したのか、学生による伴奏のアレンジの実践が見られたのかは、不明である。
- 12 注8と同様である。
- 13 例えば、「伴奏」の評価基準において、レベル1は「伴奏が弾けない」ことのみが示されているが、レベル5は、「正しいコード進行」、「歌に合ったビート」、「適切な伴奏形」、「原曲または歌いやすいアレンジを入れている」と4つの内容で構成される。
- 14 一般社団法人全国保育士養成協議会 <http://hoyokyo.or.jp/exam> 2022年9月15日閲覧

引用文献

- 1) 樋口耕一：『社会調査のための計量テキスト分析【第2版】内容分析の継承と発展を目指して』株式会社ナカニシヤ出版 2020年
- 2) 文部科学省国立教育政策研究所：『指導と評価の一体化のための学習評価に関する参考資料』https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_ongak.pdf 2022年9月15日閲覧
- 3) 松下佳代：「パフォーマンス評価による学習の質の評価 —学習評価の構図の分析にもとづいて—」『京都大学高等教育研究』(18) pp.75-114 2012年
- 4) Stevens & Levi (2013) *Introduction to rubrics : an assessment tool to save grading time, convey effective feedback, and promote student learning, Stylus Publication p.2*
- 5) 松下佳代：「学びの評価」佐伯胖(監修)・渡部信一(編)『「学び」の認知科学辞典』大修館書店 pp.442-458 2010年
- 6) 島川香織：「教員養成における「真正の評価」としてのループリック導入に向けた弾き歌い指導の試み」『関西国際大学研究紀要』(14) pp.71-84 2013年
- 7) 井上美佳：「弾き歌い指導におけるループリックの活用と成果について」『岩国短期大学紀要』(48) pp.72-83 2019年
- 8) 木下和彦：「ピアノの弾き歌いの自己評価に対するループリックの効果と課題 —学習プロセスにおける活用の実際に着目して—」『淑徳大学高等教育研究開発センター年報』(6) pp.3-14 2019年
- 9) 前掲井上(2019), p.76
- 10) 西岡加名恵：『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』明治図書出版 2008年
- 11) 前掲木下(2019), p.8
- 12) 前掲松下(2010), p.455
- 13) 前掲松下(2010), p.457
- 14) 前掲木下(2019), p.11
- 15) 前掲松下(2012), pp.85-87
- 16) 小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説音楽編 文部科学省 2018年
- 17) 前掲松下(2010), p.450